

分野 (2) 気管支ぜん息・COPD患者の健康回復に関する調査研究

研究課題名：客観的指標によるぜん息コントロール状態の評価

申請課題名：気道炎症、気流閉塞、および気道リモデリングに関するそれぞれの客観的指標を用いたぜん息コントロール状態評価法の確立

調査研究代表者氏名：石井 幸雄

評価コメント

- ・喘息コントロール状態を気道局所のサンプルの解析により客観的に評価する有意義な研究である。この成果を、地域診療の現場にどのように還元していくかが今後の課題であろう。
- ・気管支喘息の病態における喀痰、呼気凝集液、画像によるコントロール状態の客観的把握を目指している。
- ・気流閉塞についてもIL-4、IL-9、IL-13などと%FEV1が逆相関することを観察したこと、Air Trappingが気管支拡張薬吸入前後でぜん息では不変、せき喘息で改善したことから、作用部位を末梢気道としたことは意義がある。
- ・気道炎症の指標として喀痰中のIL-4が好酸球数と相関があり、IL-8、TNF- α 、RANTESなどが好中球性炎症の程度と相関するなどの指標となる可能性を指摘できたことは評価できる。
- ・リモデリングについてのE-カドヘリン、PIPC、TGF- β の長期効果を指摘できた。
- ・E-カドヘリンが不可逆な気道のリモデリングを表しているものとするならば、今までそのような指標はなかったので、非常に興味深い物質である。
- ・喘息やCOPDの気道炎症、さらに気道リモデリングのコントロール状態の評価に役立つサイトカインに重点をしぼって検討するのが、効率が良いのではなかろうか。
- ・呼気凝縮液中のサイトカイン濃度については、その検出感度の問題など今後の課題であろう。
- ・喘息の長期管理のバイオマーカーとして非侵襲性の検体である呼気凝集液および喀痰を用いてその中のサイトカイン、ケモカイン等を測定するというのは、患者の負担を考えると有用な方法であるが、同一患者における治療による短期的な変化、長期的な変化等について臨床症状と各種バイオマーカーとの相関については、まだ不明であり、今後の課題である。
- ・治療による変化が見られる指標と、見られない指標、長期のリモデリングに関する指標と、焦点がはっきりしないために、ぜん息のコントロール状態評価にどのように役立てていくのかははっきり見えてこないのもう少し研究計画を絞って行う必要もあると思われる。
- ・Eカドヘリンに関しては、症例数がまだ少なく、リモデリングの他の指標との関連もはっきりしないので、今後の研究も必要である。

・経時的にどのように変化するのか、また気管支喘息にどの程度特異的か等、その臨床的意義について更に研究を続けて欲しい。

・各々について興味深いデータが得られているが、ソフト3事業についてどのようなかわりを持つのかの目的意識がはっきりしない。